

国立大学のアドミッション・オフィス 入試制度の現状と課題

－入試過程における大学関与のあり方に着目して－

デメジャン・アドレット

1. 本研究の目的と課題

今日のカザフスタンにおける大学入試制度は、「一律学力テスト」と「一律民族テスト」という全国学力検査を核としている。この入試制度については、志願者の専門領域に関する知識、興味・関心等を考慮しておらず、また大学が入試過程へ関与していないとの問題点が指摘されてきた。こういった状況を踏まえれば、同国の大学入試には、受験者の興味・関心、目的意識等の学力以外の資質・能力を選抜基準とすることが求められると言えよう。また、入学試験を大学教育の一環として捉え直し、大学が関与する入試のあり方を模索することが必要であると考ええる。このような問題意識を基に、本研究では、学力を偏重せず、また、それ以外の資質・能力を評価し、大学主導で実施される日本のアドミッション・オフィス入試（以下AO入試）制度に焦点をあてた。

AO入試において、大学は、入学後の教育目的を考慮し、入試時点での到達度だけでなく、以前の活動と今後の可能性についての判断を含む評価の教育的視点から選抜方法や評価基準を設定し、入試の実施主体となっている。また、AO入試は、一般入試や推薦入試に比べ、早い時期から始まり、大学は、出願以前のオープンキャンパスなどから、入学後のカウンセリングなどに至るまで、さまざまな場面でAO入試の受験者と関わっている。しかしながら、この長期プロセスにおける大学関与の具体的な体制・方法・内容に関する研究は、各大学の個別事例に限定され、全体の現状と課題に関する研究はまだ十分に蓄積されていない。AO入試の導入・改善にあたっては、個別事例の研究から得られた知見が、そのまま他の事例に応用できないため、複数の事例の調査を通して、その総体的な特徴を把

握し、そこから示唆を得る必要があると考える。

そこで本研究では、日本の国立大学における AO 入試の実践に基づき、特に教育的視点から入試過程における大学関与に着目し、AO 入試制度の現状と課題を明らかにすることを目的とする。具体的には、入試の実施形態・内容における共通点の抽出を試み、国立大学における AO 入試の総合的な特徴を把握し、また、5 大学（A～E 大学）の調査を通して、入試の実施過程における共通する問題点を解明し、それらの解決のための方向性を検討した。

なお、本研究においては、分析対象を国立大学における AO 入試に限定した。その理由は、国立大学の AO 入試が、教育的視点から高く評価されていることに求められる。

2. 論文の構成

序 章 研究の目的と方法

第 1 節 本研究の問題意識

第 2 節 本研究の目的、課題、方法

第 1 章 アドミッション・オフィス入試制度の導入背景

第 1 節 アドミッション・オフィス入試制度の導入背景における社会変動の動向

第 2 節 アドミッション・オフィス入試の制度的位置づけ

第 3 節 国立大学におけるアドミッション・オフィス入試制度の教育的役割

第 2 章 アドミッション・オフィス入試制度の現状

第 1 節 アドミッション・オフィス入試の実施形態

第 2 節 アドミッション・オフィス入試の実施内容

第 3 節 調査結果の検討

第 3 章 アドミッション・オフィス入試制度の課題

第 1 節 アドミッション・オフィス入試の情報提供段階における課題

第 2 節 アドミッション・オフィス入試の選抜段階における課題

第 3 節 アドミッション・オフィス入試の教育的支援段階における課題

終 章 本研究のまとめと今後の研究課題

第1節 各章の概要

第2節 今後の研究課題

3. 論文の概要

第1章では、国立大学のAO入試の導入背景における社会変動の動向、AO入試の制度的な位置づけ、AO入試の大学における教育的役割について、入試の経営的側面（学生数確保）と教育的側面（求める学生の選抜）に焦点をあてて整理した。とりわけ、社会変動の動向に関しては、高等教育のユニバーサル化により入学者の能力が多様化し、また、18歳人口の急減がみられる中で、入試の経営的側面が強調され、臨時教育審議会以降の大学入試の多様化・多元化を進める教育改革によって入試の教育的側面が重要視されるようになったことを明らかにした。AO入試の制度的特徴に関しては、受付時期開始と募集定員に関する制限がないという運営・実施上の制度的特徴が早期から学生を確保しようとする経営的側面を促し、また、詳細な書類審査と時間をかけた丁寧な面接等による選抜方法という制度的特徴によって入試の教育的側面が強調されることを明らかにした。

事例大学の導入背景については、学力低下等によりAO入試の教育的側面が重視される事例（B、C、D大学）があるとともに、学生の確保をめぐる大学間競争の激化等によりAO入試の経営的側面が重視される事例（A、C大学）があることを明らかにした。また、A大学とC大学におけるAO入試の導入に際しては、志願者数の確保という経営的側面が重視されてきたにもかかわらず、その実施状況に関しては、募集定員が少なく、高い選抜性が得られ、教育的視点から評価されていることを明らかにした。このような調査結果に基づき、本研究では、国立大学のAO入試は、経営的側面が重視されつつも、教育的側面における効果が達成されているとの結論を導いた。

第2章においては、国立大学のAO入試がその教育的役割を果たすための実施形態・内容に焦点をあて、入試の実施主体、実施方法、実施内容の3視点からその総体的な特徴を把握した。まず、実施主体については、AO入試業務への関わり方の類型をめぐる仮説的枠組みを設定し、各事例大学の現状の分析を試みた（表1）。

表1 実施主体とその入試業務への関わり方（現状分析の結果）

実施主体	アドミッション・センター			
	関わり方	直接	間接	直接／間接
学部・学科	直接	○	×	○
	間接		×	
	直接／間接	○	×	○

注) ○は本研究の事例から検証された組み合わせ、空欄のセルは本研究において検証されていない組み合わせ、×は想定され得ない組み合わせを示す。

また、AO入試の実施主体であるアドミッション・センターと学部・学科との連携は、円滑な入試実施の重要な一要因であり、この二者の連携の内容・方法については、事例調査をもとに、次のような共通点を有していることを明らかにした。多くの大学では、全学の会議において、入試に関する基本的な事項の大枠が決定され、この大枠の中で、学部・学科はその事情に合わせて入試の具体的な実施体制・方法を決定している。また、学部・学科の自治の尊重が、二者の円滑な連携を構築する上で重要な前提であることも明らかとなった。

AO入試の実施方法については、「AO入試学生募集要項」と事例調査を基に、国立大学のAO入試の実施過程における大学関与の方法についてまとめた。それによって、大学関与の方法については、情報提供段階におけるオープンキャンパス・学校訪問等、選抜段階における書類審査と面接、教育的支援段階における課題提出・通信添削等、各大学に共通する方法を抽出した。なお、選抜段階に焦点をあて、大学関与の個別方法の特徴について解明した。とりわけ、A大学とB大学におけるAO入試は、教育的効果を得るとともに、ユニークな選抜方法による大学の知名度の向上という経営的効果も上げている。なおC、D大学では、第1次選考、第2次選考の双方で面接を採用したことによって、志願者に対してよりきめ細やかな選抜を実施でき、また地方会場の開設によってより多くの受験者を獲得するという効果がみられた。

続いて、AO入試の実施内容に関して、収集した出願書類（「志願理由書」「自己推薦書」）の分析、及びインタビュー調査を通して、選抜段階における評価基準と、教育的支援の内容を明らかにした。具体的には、AO入試の第1次選考に至る

までは、各大学は主として学力以外の資質・能力と、高校時代の諸活動・体験を評価対象とするが、それ以降の段階においては、各大学（学部・学科）のアドミッション・ポリシーによって内容・評価基準に多様性がみられることを示した。

また、事例大学における教育的支援については、まず、入学準備教育を実施していないE大学を取り上げ、合格後・入学前段階における教育的支援に対するAO入学者のニーズおよび学部・学科の要求が高まっている傾向があることを明らかにし、入学準備教育の必要性を指摘した。

以上の「AO入試学生募集要項」の分析、5大学の事例調査結果をまとめ、AO入試の実施過程を①情報提供段階、②選抜段階（第1次選考、第2次選考、センター試験）、③教育的支援段階（入学準備教育、入学後の教育的支援）の3段階に区分した。この区分を踏まえ、AO入試の各段階における大学関与のあり方について、①選抜段階まで関与している類型、②入学準備教育の段階まで関与している類型、③入学後の教育的支援まで関与している類型とに整理した。

第3章では、本研究の調査結果を包括的にまとめ、国立大学におけるAO入試について、実施主体、実施方法、評価基準の観点から以下のような課題を挙げた。実施主体の観点からは、学部・学科とアドミッション・センターとの良好な関係の構築、両者の入試への関わり方における連携方策の確定など、入試業務に関する役割分担の明確化が重要な課題として指摘できる。実施方法の観点からは、AO入試の実施方法の妥当性、有効性の向上に関する課題、具体的には、各学部・学科の選抜方式の統一・統合、妥当な方法の開発のためのアドミッション・センターの研究機能の活用という方向性を示した。評価基準の観点からは、受験者の学力確保や、学力以外の評価基準の明確化に関する課題、具体的に、学力検査（主に大学入試センター試験）の資格試験としての採用、アドミッション・ポリシーにおいて明示されている学力以外の評価基準の明確化、合格者による情報の公表などが求められると言えよう。

本研究の意義は次のように整理できる。AO入試に関する先行研究では、国立大学におけるAO入試の総体的な特徴の解明が未着手のまま残されてきた。そこで本研究では、この限界性を乗り越えるために、一貫した分析の視点を設け、国立大学におけるAO入試についてその9割以上をカバーするデータを用い、より

詳細にAO入試の実施主体、実施方法、実施内容について、それぞれの総体的な特徴を把握することができた。また、偏りなく、多様な事例大学における共通問題を抽出することによって、国立大学におけるAO入試制度の課題を解明した。

4. 今後の課題

今後、本研究をさらに発展させるためには、次のような2つの方向性が考えられる。

第1に、本研究において、国立大学におけるAO入試の教育的役割について、経営的視点と教育的視点から分析した。その結果、本研究では、国立大学におけるAO入試は、経営的側面を包含しつつも、教育的側面を重視しているとの結論を導いた。今後の研究課題としては、公立・私立大学を対象に、同じ視点からAO入試の現状と課題について分析することが考えられる。

第2に、本研究では、AO入試の実施主体、実施方法、評価基準といった3つの分析視点を設定し研究を進めた。各領域において、日本の国立大学では多くの問題を抱えているが、その中でもとりわけ、実施主体に関する諸問題は、AO入試の全プロセスに関わる点で特に深刻であると思われる。すなわち、教員の負担増、学部・学科とアドミッション・センター間の連携方策の未解明、入試に関する専門知識をもった人材の不足は、入試の全ての段階にわたってその円滑な実施を妨げており、これらの問題の解決は喫緊の課題である。その解決に向けた基礎研究が今後特に必要であろう。

5. 主要参考文献

- ・中井浩一『大学入試の戦後史』中央公論新社、2007。
- ・渡辺哲司「AO入試のこころ」、山田耕路、渡辺哲司『大学歳時記』、海鳥社、2007。
- ・渡辺哲司「国立大AO入試による入学者の特性」大学教育学会『大学教育学会誌』第28巻、第1号、2006。